

令和 5 年度小松市立矢田野小学校 学校評価 2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・ 8 月提出）	取組の成果と課題（年度末・ 3 月提出）
生徒指導	自ら主体的に活動し、互いの良さを認め合える児童の育成 ＜生徒指導 3 機能を生かした授業づくりや学級づくりの共通実践＞ ①一人ひとりが主体的に考えて行動することができるように、4 つのステップを全職員で共有し、児童への関わりを進めていく。 ※ 4 つのステップ①目的意識を持つ②見通しを持つ③自己決定する④責任をもって行動する ②振り返りを行う際に教師が積極的に価値づけや意味付けを行い、更なる主体性の向上を図っていく。	・年度初めに 4 つのステップを職員全体で共有し、それを生かして取り組みを進めた。教職員の毎月のふり返りでは、ほとんどの教職員がそれを意識して取り組みを進めている状況である。 ・2 学期は、運動会などの大きな行事が予定されている。その行事を進めるにあたり、再度 4 つのステップを全体で共有していく。具体的には、①運動会の目標を決める、②本番までの見通しを持つ、③自身が頑張ることを決める、④行動（練習）する、⑤振り返るという流れである。振り返りの際には、教師による価値づけを忘れずに、主体性の向上を図っていきたい。	・1 年間を通して、教職員が「4 つのステップ」を意識して、児童への関わりに努めることができた。また運動会の時期には、4 つのステップと連動させた「学校行事ががんばりカード」を活用することで、さらに教職員が「4 つのステップ」を意識して児童への関わりを行うことができたと思う。 ・来年度に向けては、学年の目標から個人の目標を考える流れを重視し、学年の発達段階に応じた「学校行事ががんばりカード」を作成していきたいと考えている。また、月 1 回の学年間での振り返りを行う時間を確保するために、あらかじめ週案にその時間を記載するなどの手立てを講じていきたいと考えている。
特別活動	自分たちで楽しくよりよい学校を作ろうとする児童の育成 ・学級をよりよくするためにクラス会議に取り組み、児童の主体性や学級の自治力の向上を図る。 ・児童会活動を通して、自分たちで学校をよりよくする、盛り上げるための活動を計画し、実践する。 ・児童議会で、学校全体に関わる問題解決の方法を話し合ったり、楽しいイベントを企画・提案する。 ・縦割り活動を 2 か月に 1 回実践し、他学年同士の関わりを深める。	・楽しい学校をつくるため、クラス会議でクラスをよりよくしようと考え実行したり、委員会で様々なイベントを企画し実行できたりして、学校全体に活気が生まれた。 ・縦割り活動（名称：やさしい Day）を 2 か月に 1 回実施したことで、6 年生の「企画・進行情」が身に付いてきている。また、学年を超えて児童相互の仲も深まった様子がある。 ・2 学期には運動会や「やたのんびつく」など、縦割りで関わる行事がいくつかある。クラス会議で各行事の目標を決めたり、そこへ向かうための自分たちの在り方を共有したり、学校全体が前向きに楽しく過ごせるよう、担当者が支援したい。	・運動会や「やたのんびつく」など、児童が活躍する場が多くあった。クラス会議で行事に向けての目標を決めたり、目標へ向かうための課題を話し合ったりして、各学年がそれぞれの目指す姿を共有し、実践することができた。 ・縦割り活動では、「やさしい Day」の集大成である「やたのんびつく」を開催し、縦割りで仲良く楽しく過ごすと共に、各学年がそれぞれの役割を担い、責任を果たそうとする姿が見られた。 ・毎月、様々な行事を企画・提案したことで 6 年生の運営能力や時間を有効活用する力が高まった。 ・来年度に向けては、児童が楽しく安心・安全に過ごせるよう、クラスや学年間で差がでないように、クラス会議の在り方や意味を見直したり、職員間でクラス会議の議題などを共有したりしていきたい。
特別支援教育	＜自分と相手を大切に、意欲を持って前向きに生活できる児童を育てる＞ ・児童の情報を職員間で共有し、児童理解の会や校内委員会等の場を活用し、児童の特性を共通理解し、職員相互で協議して個に応じた支援策を考え、共通実践を進めていくことで支援していく。 ・校内の人材（SC、心の相談員、支援員）を有効に活用し、児童・生徒に寄り添い、その困り感を支え、意欲を持って前向きに生活できるように支援する。 ・幼保小中の連携を密にし、長期間で子どもの育ちを支援する。	・毎月の児童理解の会では、気になる児童についての情報共有を行うことで、職員の協力体制を築けるよう努めた。特別な支援を要する児童について、適宜クラス会議や校内委員会を設け、支援方策の検討・実施に努めた。気になる児童については、協力体制を築いた上で、定期的な様子の確認を今後行っていく。 ・SC、心の相談員には、児童に寄り添って教室の内外で関わって頂いた。おかげで、児童は登校できた。また保護者面談等に向けて、アドバイスを頂き、話し合うポイントを整理できた。支援員には、特別支援学級在籍児童や学習に集中できない児童等に寄り添って支援をして頂いた。 ・夏季休業中に、幼保園を訪問し、園児の様子を参観して、情報収集を行い、来年度入学予定児の園児の実態を把握することで、幼保園と連携を図り、円滑な入学を支援していきたい。	・校内委員会では、学校生活に不応を示したり、他の児童との関りが上手くできなかったりする児童について話し合う場を適宜もつた。時間的に余裕のない中ではあったが、案件について参加職員を精選し複数で意見を申し合うことで、一人ひとりの児童の特性に応じた支援方策を考え実践することで児童の困り感によりそうに努めた。 ・校内の人材の中でも、特に支援員・スクールカウンセラー・心の相談員の方には、学習支援、見守り支援、授業者の補助、学校生活に不応児童の対応等・教育活動より円滑に進められるように、毎日大変な努力をいただいた。 ・中学校との連携については今年度は、前年度の 6 年担任が訪問し卒業生の様子を見に行くことができた。3 学期には今年度の 6 年生の中で学習面、行動面で気になる児童について情報を伝えていきたい。幼保・中学校との連携については、今後も継続的に行うことが望ましいと思われる。
（キャリア教育） 道徳教育	＜自他のよさを見つめ、前向きによりよく生きようとする児童の育成＞ ・学級活動や総合的な学習の時間を中核として、自他と関わり、積極的によさを見つけることができるように支援していく。 ・係や委員会活動に進んで取り組み責任を持ってやり遂げられるように、定期的に振り返るなどの支援をしていく。 ・個々の目標や課題に前向きに取り組む、解決したりやり遂げたりすることによって満足感が味わえるように支援していく。	・4 月に、学年のゴールでの姿を思い描かせて児童主体で作った目標を柱として、日々の学習活動を行っている。また、折に触れて目標に立ち返り、学年のゴールを見据えて今の自分やクラスの姿を捉え、道徳の時間の学びとも関連付けながら前向きによりよい生き方を選択していくように支援している。 ・道徳の時間や学活、帰りの会などを通して、自他のよさの認め合いを継続することで、自己肯定感、自己有用感の高まりが見られ、よりよい集団づくりにもつながっている。 ・2 学期以降も、児童が中心となって活躍する場を設け、新たな課題を解決し前向きに進んでいるよう支援に努めた。 ・道徳の時間の学びと生活を結び付けるなどして、道徳の時間を要とした道徳教育を進め、児童のよりよい成長につなげていく。	・学年スタート時、児童と共に 1 年後（ゴール）の姿を描いて作った学年・学級目標は、いつも身近にあり、すべての教育活動の指針となってきた。集団の中で、教師がそれぞれのよさや努力する姿を見逃すことなく目標に照らし合わせて価値づけたりしている。また、多様な考え方を認められるようにもなっており、自己肯定感や有用感の高まりにもつながっている。 ・児童が中心となって活躍する場（授業・行事等）においても PCA を全体で共有していた。自分たちで課題を見つけて改善する方法を考え、次に向かう力、よりよい前向きに進もうとする力を身につけてきている。担任の先生方の声かけのおかげもあり、家庭にも浸透してきていると思われる。 ・道徳授業では、内項項目の低・中・高や ABCD の違いを把握し、ねらいを焦点化するよう心がけてきた。様々な場面で児童のものの見方や考え方が多面的多角的になっている。また、多様な考え方を認められるようにもなっており、自己肯定感や有用感の高まりにもつながっている。 ・児童が中心となって活躍する場（授業・行事等）においても PCA を全体で共有していた。自分たちで課題を見つけて改善する方法を考え、次に向かう力、よりよい前向きに進もうとする力を身につけてきている。担任の先生方の声かけのおかげもあり、家庭にも浸透してきていると思われる。 ・並行読書は、2 学期末の時点で全 4 つの学年が活用できた。来年度に向けて、国語教科書に載っている関連図書を見たり読んだりできるように工夫し貸出冊数が増えるようにしていく。
図書教育	＜読書の習慣化と質的向上を図り、不読者をなくす＞ ・おすすめの本を 10 冊以上読むと、プラス 1 冊券が、10 冊以上読むと、プラス 2 冊券がもらえる。おすすめの本を読むことで、読書の質的向上を図る。 ・いしかわ学校読書の日（小松市民読書の日）には、毎月 3 冊貸し出す。「先生のための図書だより」を発行し、担任からの声掛けをすることで、不読者をなくす。 ・年に 2 回夏休みと冬休みには、親子読書にも取り組み、保護者にも読書に関心を持ってもらう。親子読書は 95% の提出を目指す。 ・国語の授業で、年 1 回は並行読書を活用する。	いしかわ学校読書の日（小松市民読書の日）には、毎月 3 冊貸し出している。それにプラスして、おすすめの本を達成した児童はさらに本を 1 冊借りることができる。いろいろな取り組みを通して、読書の習慣化が身についている児童が半数いる。 ・しかし残りの半数の中には、月に貸し出しが 2 冊以下の児童の数が一定数いる。一人当たりの本の貸出数は、32.7 冊で、引き続き声掛けをしていきたい。夏休みの取組である親子読書も今年は、9.5% を目指している。 ・関連読書は、1 学期末の時点で 4 つの学年が活用できた。学校研究としての取組と合わせて、関連図書の一覧表を提示し全学年が活用できるように声掛けをしていく。	・良書に親しむために編んでいる「おすすめの本を読もう」の取り組みは、低学年は多くの子が達成しているが、中・高学年の達成者は少なかった。読書の質的向上を図るために声掛けをした。 ・良書に親しむために、1 年生は毎月家族読書に取り組んだ。読書の習慣化を図るためであるが、本好き児童は確実に増えている。しかし、昨年度と比べると貸し出し冊数が減少している。学校全体の傾向としては、図書館でよく本を借りる児童とそうでない児童の間にまだ格差があるので、それをなくすることがこれからの課題である。 ・夏休みも親子読書に取り組んだ。今年度の達成率は、96.5 パーセントであった。だいが定着してきている。担任の先生方の声かけのおかげもあり、家庭にも浸透してきていると思われる。 ・並行読書は、2 学期末の時点で全 4 つの学年が活用できた。来年度に向けて、国語教科書に載っている関連図書を見たり読んだりできるように工夫し貸出冊数が増えるようにしていく。
保健教育	自分の身体や健康に関心を持ち、健やかな心と体を育む児童の育成 ・「ミニ健康指導」を、年間 2 回実施する。 ・規則正しい生活を送るために、早寝早起き朝ごはんを推奨する。 ・感染対策予防として、ハンカチティッシュを毎日持つてくる。 ・お口の中の清潔や虫歯を防ぐために、給食後は、歯磨きをする。 ・これらによる成果を検証する。	・9 月には、「健康」について、1 月には「感染症の予防」について、身体計測の後に、ミニ健康指導をする予定である。 ・夏休み明け生活習慣が乱れがちである。また 9 月から運動会の練習も始まる。しっかりした生活習慣を確立させるために、2 学期は、毎月保健だよりで、「早寝早起き朝ごはん」を呼び掛けていく予定である。 ・毎朝の健康観察で、ハンカチ・はなみちを持ってきている児童に聞いている。ほとんどの児童は、ハンカチ・はなみちを持ってきている。良い傾向と思われる。 ・一学期は、全学年に歯科指導を行った。また、保健委員会も、「歯磨きビンゴ」の取り組みをした。その振り返りの中で、「歯磨きの大切さが分かった。これからも歯磨きを続けていきたい。」と書いている児童がとても多かった。 ・二学期は、自分の身体や健康に関心を持たせるために、全学年にタブレットで、9 月に心のアンケート、10 月に保健アンケートを行う予定である。	・1 学期保健委員会の取り組みとして歯磨きビンゴをした。それ以来児童たちには、給食後の歯磨きをする習慣が身についている。 ・3 学期も 2 学期同様、児童に規則正しい生活を送ってもらうために、毎月保健だよりで、「早寝早起き朝ごはん」を呼び掛けていく予定である。 ・11 月から風邪による欠席が増えた。そこで保健委員会は、手洗いをしようと言う取り組みを行った。休み時間・児童の手にスタンプを押して、そのスタンプが消えるまで手を洗おうという内容である。みんな、楽しみながら取り組むことが出来た。手洗いを習慣づけるきっかけになった。1 月の身体測定の前には、養護教諭がパワーポイントを使って、感染症予防についてどうしたらよいのか具体的に話をする。 ・2 学期の学校保健委員会は、「自分のことを好きになろう～世界でたった一人の自分～」をテーマで、ライフコーチらえの沢田千恵氏をお迎えし講演会を行った。沢田知恵氏は、「あるあるタム」や「コップの水」など児童に分りやすい話してくれた。児童のみならず、保護者にも大好評であった。児童が自己肯定感を高める良いきっかけになったと考える。
体育	自分の身体や健康に関心を持ち、健やかな心と体を育む児童の育成 ・学期ごとに体育の授業で行った効果的なウォーミングアップや練習、場の設定を職員間で共有する。 ・体育の授業改善として、スモールステップで達成感が感じられる環境やルールを設定し、運動特性に合わせた授業設計をする。どの学年でも「体育が好き」と答える児童が 70% 以上になることを目指す。	・1 学期末に授業の設定や指導方法について共有できた。カリキュラム上 2 学期に実践できる学年もあるもので、参考に体力づくりに努めることができる。考える。 ・5 月時点で「体育が好き」と答える児童は、1 年 9.6%、2 年 9.8%、3 年 9.8%、4 年 9.4%、5 年 9.0%、6 年 9.3% であった。種目や時期による影響もあると思うので 2 学期も継続して達成感を得られる授業づくりをしていく。	・2 学期末にも授業の設定や指導方法について共有できた。来年度は似ている種目や競技を統一的学年で揃えているので、用具や場の設定などを学年の枠を超えて共有できると思う。 ・2 月時点で「体育が好き」と答える児童が、1 年 9.6%、2 年 9.8%、3 年 9.8%、4 年 10.0%、5 年 8.6%、6 年 9.1% であった。1 学期が元々高い割合だったのが高い意欲を維持できたと言える。しかし、高学年になるほど、「やや楽しい」や「あまり楽しくない」の割合が増えている傾向にあるので、高学年の授業改善、中学年までの基礎作りが大切であると言える。

学校関係者評価	◎子どもたちのことを考えた様々な教育活動に感謝している。先生方の努力が子どもたちのよい姿となっているのではないかとと思う。 ・すべての子どもが 100 点をめざさなくてもよい。誰かと比較するのではなく、その子一人一人のよさや伸びを認めていくことを大切にしてほしい。一人一人がしなくてはならないことをしていければよい。学校評価についても全て 100 点をめざさなくてもよいのではないかと。軽重をつけ取り組んでいけばよいと思う。 ・働き方改革については、なかなか難しいが優先順位をつけて改善していくよいのではないかとと思う。 ・体力運動能力向上に向けて「体育が好き」という視点で取組を進めているのはよい。遊びの中から運動能力の基礎をつづけていけるとよい。体育の時間に運動遊びを取り入れ、それを日常的な遊びにつなげていけるとよいと思う。そのための環境づくりもできるとよい。 ・あいさつをよくしていくには、よい姿をみせるとよい。教職員や上級生が手本となり、よくなるまで全員で徹底して取り組むことが大切だ。南部中学校区にある小松大谷高校のあいさつがとてもすばらしい。交流して手本となるよい姿をみせてもらってもいいのではないかと。
---------	---